

# 人馬

楠山正雄

青空文庫



むかし、三人の坊さんが、日本の国中を方々修行して歩いていました。四国の島へ渡つて、海ばたの村を托鉢して歩いていゝうちに、ある日いつどこで道を間違えたか、山の中へ迷い込んでしまいました。行けば行くほどだんだん深い深い山道に迷い込んで、どうしてももとの海ばたへ出ることができません。そのうちにだんだん日が暮れてきて、足もとが暗くなりました。気をあせればあせるほどよけい道が分からなくなつて、とうとう人の足跡のない深い山奥の谷の中に入り込んでしま

ました。もう道の<sup>みち</sup>ない草<sup>くさ</sup>の中をやたらに踏<sup>ふ</sup>み分<sup>わ</sup>けて行きますと、ひよっこり平<sup>たい</sup>らな土<sup>とち</sup>地へ出ました。よく見<sup>み</sup>ると、人の家<sup>いえ</sup>の垣<sup>かき</sup>根<sup>ね</sup>らしいものがあつて、中には人が住<sup>す</sup>んでいるようですから、坊<sup>ぼう</sup>さんたちは地<sup>じ</sup>獄<sup>ごく</sup>で仏<sup>ほとけ</sup>さまに会<sup>あ</sup>つたようによろこんで、ずんずん中<sup>ちゆう</sup>へ入<sup>はい</sup>つてみますと、なるほど一軒<sup>けん</sup>そこに家<sup>いえ</sup>がありました。

でもよく考<sup>かん</sup>えてみると、こんな人の匂<sup>にお</sup>いもしそうもない深<sup>ふか</sup>い山<sup>や</sup>ま奥<sup>まおく</sup>にだれか住<sup>す</sup>んでいるというのがふしぎなことですから、きつと人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>ではない、鬼<sup>おに</sup>が化<sup>ば</sup>けたのか、それともきつねかたぬきか<sup>ば</sup>が化<sup>ば</sup>かすのではないかと思<sup>おも</sup>つて、少<sup>すこ</sup>し気<sup>き</sup>味<sup>み</sup>が悪<sup>わる</sup>くなりました。けれど何<sup>なに</sup>しろくたびれきつて一<sup>ひと</sup>足<sup>あし</sup>も歩<sup>ある</sup>けない上に、おなかがすききつているものですから、もう鬼<sup>おに</sup>でも化<sup>ば</sup>け物<sup>もの</sup>でもかまわな、と

にかく休やすませてもらおうと思おもつて、その家いえの戸とをとんとたたきました。

すると中から「だれだ。」といつて、六十ばかりのおじいさんの坊ぼうさんが出て来きました。何なんだかこわらしい、食くいつきそうな顔かおをした坊ぼうさんでしたけれど、今いま更さらどうにもならないと思おもつて、三人にんは上あへ上がりました。するとあるじの坊ぼうさんは、

「お前まえさんたちはおなかがへつたろう。」

といつて、ごちそうをお盆ぼんにのせて出だしてくれました。ごちそうは大たいへんうまかつたし、あるじの様子ようすも顔かおに似に合あわず親しん切せつらしいので、三人にんはすっかり安あん心しんして、食たべたり飲のんだりしていました。

夕飯ゆうはんがすんでしまおうと、あるじの坊さんぼうさんは手をならして、

「これこれ。」

と呼びますと、もう一人ひとりのやはりこわらしい顔かおをした坊さんぼうさんが

出て来きました。

何なにをいうかと思おもうと、

「御飯ごはんがすんだから、いつもの物ものを持もつておいで。」

といいつけました。坊さんぼうさんはうなずいて出ていきました。いつ

たい「いつものもの」というのは何なんだろうと、三人にんは物ものめずらし

さが半はん分に、気味悪きみわるさが半はん分で、何なにが出るかと待まちうけてい

ますと、やがてさつきさつきの坊さんぼうさんが、大きな馬うまのくつわと、太ふといむ

ちを持もつて戻もどつて来きました。するとあるじはまた、

「それ、いつものとおりにやれ。」

と、いいつけました。

「何をなにするのか。」と思おもつていますと、もう一人ひとりの坊ぼうさんは、いきなりそこに座すわつている三人にんのうちひとりの一人をそれは軽かるがる々と、かごでもつるすようにつるし上げて、庭にわにほうり出だしました。そして持もつて来きたむちでその背せなか中なかをつづけざまに五十たび打うちました。坊ぼうさんはぶたれながら、ひいひい悲かなしそうな声こえを立てたてましたが、あとの二人ふたりはどうすることもできないので、立たつたり、座すわつたり、気きをもんでばかりいました。そのうちとうとう五十たびぶつてしまふと、こんどは着物きものをはがして、裸はだか体かの上かをまた五十たび打うちました。すっかりでちようど百たび打うつた時とき、もうだんだん虫むしの

鳴くような声でそれでもひいひいいつていた坊さんは、急に一聲高く「ひひん。」と、馬のいななくような声を出しました。その拍子に顔が急に伸びて、馬のような顔になりました。みるみる体が馬になって、たてがみが立って、しつぽがはえて、手足を地びたにつけて、ひよいと立ちますと、もうそれはりつぱな四本の足になって、砂をけていました。それはどこから見てもほんとうの馬に違いありませんでした。

鬼の坊さんは、その馬にくつわをかませて綱をつけて、馬屋へ引いていきました。あとの二人は目の前で自分の仲間が馬になってしまったので、自分たちもいずれ同じめにあうのだろうと思うと、生きたそらはないので、真つ青な顔をして、ぶるぶるふるえ



ていました。するとさつきおにの鬼ぼうの坊ぼうさんは、また戻もとつて来きて、こ  
 んどは二にばんめの坊ぼうさんを庭にわに引ひき下おろして、同おなじようににむちで  
 百ひゃくたびぶちますと、これも馬うまになつて、「ひひん。」といいななき  
 ながら四よつ足あしで立たちました。その時とき鬼おにの坊ぼうさんはむちをほうり出だ  
 して、

「ああ、くたびれた。少すこし休やすもう。」

といつて、汗あせをふきますと、あるじの坊ぼうさんも、

「どれ、飯めしを食たべて来くるかな。」

といつて、立たち上あがりました。そして行いきがけに、もう一ひと人りの残こ  
 つてふるえている坊ぼうさんをこわい目めでにらめつけて、  
 「そこにじつとしていろ。すぐもとに戻もどつて来くるから。」

といつて、もう一人の鬼の坊さんと奥へ入つていきました。

## 二

その後で坊さんは、心の中で一生懸命仏さまにお祈りをしながら、「どうしたら逃げられるか、せつかく逃げ出しても、つかまって殺されれば同じことだし、つかまらないまでも、この深い山の中では、道に迷つて行き倒れになるばかりだ。」と思つて、ぐずぐずしていますと、あるじの鬼がふいと奥から声をかけて、「裏の田に水はあるか。」

と聞きました。坊さんはこわごわ立つて、戸をあけて、裏手を

ながめますと、そこに深い田が出来ていて、水がいっぱいあふれていました。「あの深い水たまりの中に、自分たちをつき落とし殺すつもりではないか。」と気味悪く思いながら、坊さんは戻つて来て、

「田に水はございません。」

と答えました。

鬼は、

「ううん。」

といつて、またばりばり何かをかじつて食べる音がしました。なかなか大食いだとみえて、さんざん食べたたり、飲んだりして、こんどはおなかがかくちくになると、鬼は二人とも、ぐうぐう高いび

きをかいて寝込んでしまいました。

鬼共おにどものいびきの音おとを聞くと、坊さんぼうはほつと息いきをつきながら、今いまのうちに逃にげ出だそうと思おもつて、もう真まつ暗くらになった山道やまみちをやたらに駆かけていきました。やがて向むこうのこんもり木の茂しげつた中からぼつんと一つ明あかりが見みえて、家うちがそこにありました。こんどもまた鬼おにの住すまいではないかと、気味きみ悪わるく思おもつて、そつと前まえを通とおり抜ぬけて駆かけていきますと、うしろから、

「もしもし、どこへ行くのです。」

とやさしい女の声こえで声こえをかけられました。坊さんぼうはぎよつとしながら、振ふり返かえつてみますと、若わかい女めでしたから、やつと安あん心しんして、

「道に迷った旅の修行者でございりますが、三人のうち二人まで仲間をなくしてしまいました。」

「といって、今し方出会ったふしぎな出来ごとを残らず話しました。すると女は大そう気の毒がつて、

「じつはわたしも鬼の娘です。永年あなたと同じような気の毒なめにあつた人を見て知っています。けれどもそれをどうして上げることもできませんでした。でもあなたはお気の毒な人だから、助けて上げたいと思います。もう間もなく鬼がここまで追つかけて来るに違いありませんから、少しでも早く逃げておいでなさい。これから一里ばかり行くと、わたしの妹がいます。そこへわたしから手紙をつけて上げます。」

といつて、手紙を書いてくれました。

坊さんは度々お礼をいって、手紙をもらつて、また足にまかせて駆けて行きました。なるほど一里ばかり行くと、松のはえた山があつて、その山の陰に家がありました。そこへ入つて、手紙を見せますと、若い女が出て来て、

「お気の毒だから助けて上げたいと思ひますが、あいにく今は悪い時刻です。」

といつて、ふしぎそうな顔をしている坊さんを、いきなり戸柵の中にかくしてしまいました。しばらくすると、どこからか血なまぐさい風が吹いてきて、がやがや人の声がしました。やがて入つて来たのは、これも恐い顔をした鬼でした。そしてもう入つ

て来るなり鼻はなをくくんくんやりながら、

「ふんふん、人くさいぞ。人くさいぞ。」

とわめきました。

「ばかなことをいってはいけません。きっとけだものくさいの間ま違ちがいでしよう。」

と女おにはいつて、牛うしや馬うまの生なま々なましい肉にくを切きつて出だしてやりますと、鬼おにはふうふういいながら、残のこらずががつして食たべた後あとで、

「ああ、腹はらがくちくなくなつた。だが、どうも、やはり人くさいぞ。今いまに探さがし出だして食たべてやる。」

といつて、またどこかへ出ていきました。

この間坊あいぼうさんは始しじ終ゆう戸棚とだなの中からそつとのぞきながら、びく

びくふるえていましたが、その時女は戸棚をあけて坊さんを出してやって、

「さあ、早く逃げておいでなさい。」

といて、詳しく道を教えてくれました。坊さんは涙をこぼして、手を合わせて拝みながら、ころがるようにして逃げていきました。何でも山の中の道を三里ばかり夢中で駆けたと思うと、だんだん空が明るくなって、夜が明けました。

その時にはもういつか村の中に入っていました。方々の家からはのどかな朝の煙がすうすう立ちのぼっていました。







# 青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人馬

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>